

でなければならぬ、純信仰を基礎としての「身は従ひ奉る様なれども心は従ひ奉らず」と云はれし我祖の言は適切に此を云はれたものである。

我祖の信仰を受けつぎ、其の御教に依つて教化せられた門下は皆不惜身命に本化の純信仰の流れを後世に傳へた。此の流れを汲んだ人々は時の專横な爲政者の慘酷なる迫害にも屈せず自我の發現に悲惨な犠牲となつた。先人の紅の血もて彩られた其の流れも、初は妥協も自我の爲のが漸く妥協其れ自身となり遂には尊き自我の生命を打ち捨て、專信順應にのみ心懸くる様になつた。祖の純信仰はいかに？先哲の血もて染めし流れは何處に？こちたき論議を戦はしてまでも攝受と云ふ美名の下に生ける屍を庇護し、妥協本來の意義を失し純信仰をなくした屍を養ひつゝあるのではなからうか

宗教は論議でない。私はいつでも思ふ……宗教

に對して其の崇高さを思ふ時、理路に走つた論議や人生觀宗教觀などの説を先づ後廻しにして、只夫れ宗教としての強大なる力に感じ其の大きな總

てに合体して少さい自己の完全を期すべきだ。パイロンが悲曲マンフレンドの中に「如何に我等人間は總ての主權者なりと云ふも一は高き理想に向へる神！他は底き慾望に渴せる塵芥なり。」と云へるが如く半神半獸の我等は迷を去る事は不可能だ。が然し本化の純信仰に立つた場合、其處に同化と順應の二方面を把持し得て、攝折を超越した自我の衝動に依つて信仰の發露、簡性の爲に將社會の爲に、生き得指導し得て本化の大道をとこしへに傳へる事が出来るのだ。……と。

信仰が無い場合、攝受折伏共に單一としての價値はあるも全体としては何等の價値が無い。況や祖の本意は信仰に在せられた。我等は先づ信仰の体現に努め而して後宗祖の末流に加はるべきだ。

過去より現在へ

江原亮勇

私しの過去!!今の靜寂な宗教生活に於いて最も

感激を加へるものである、走馬燈の夫の様に西に東に轉化された私自身の思想、次から次へと流れて行くタイム線上に立つて人生の裏に泣きしたことの幾度あつたが知れぬ、強いて綜合すれば私しの過去の思索の人であつた、此は現在の宗教家と云ふ必然的に起つて來る思想の傾向ではなくて過去より現在に流れてゐる思索の連鎖である、私はニイチエの哲學を知らぬ然し彼が享樂主義の主唱者たることを知つてゐる、淺薄な凡俗な私しの頭はハイネの詩を解くに足らぬ然し彼の詩が超物理的だと云ふ事を知つてゐる、印度詩聖タゴールの詩を譯するの頭はなくとも其の優雅な詩調に酔はされる一人であつた、然らば私は詩を作る男であらうか、否々詩趣に生かしても詩作の人でない、センチメンタルな私は熱情的な思想家であることだけは知つて居る二十歳に足らぬ私しの過去既に戀あり涙のあつたこと、所謂私しの性格の反面に強激の情炎が燃へて居たことは掩ふべからざる事實であつた、物欲に倦まされた私しは物欲と哲理

の統合!! 衣食と精神の融合!! 斯ふした須雜な思想の起つたのが二十歳過ぎての私しの思想状態であつた、軍隊生活に於いて私しの思想を裏切られたことは幾度か知れぬ、又一方紳ひ度だけ紳びると云ふ青年の自由思想の立場から冷靜に軍隊の批判に力めたこともあつた、劃されて行く日毎の軍律に聊か忍從的な殊勝な氣分に成つて眞面目に働いた時であつた、が然し一般から云ふと社會を忘れ!! 教育を忘れ!! 生來の宗教さへも忘れて忘我的に立ち働いたと云ふのが妥當な感情かも知れぬ、斯ふして軍國に盡して再び宗教生活に還へつた私しの思想状態は、強く誇張!! 美的生活!! と云ふ方面に流動を初めた、結果

「凡てを詩的に!! 美的に!! 解決し想及して若い宗教家と云ふ誇張に照らして行動して行かう」と云ふのが近來の私しの思想の多分子である、將た永遠人生の深刻を望まんとする思想となるかも知れぬ、そうして宗教に思いきり浸潤して全身を任して見たい様な而かも其の信仰のバプテスマか

ら現はれた自然の強力の救であり得たい、換言すれば宗教熱愛と、救ひとの所有者であり得たい、嗚呼誇張何と云ふ美しい味氣ない單純な言葉だらう、只に好奇心から來た威張ると云ふ様な言葉でなくして自身の克己!!反省!!救ひの意義たるべきものである、或女史が「赤き血汐に觸れもせで寥しからずや道を克く人」と云つたのも矢張り誇張の反面たる靜寥を漏したものに過ぎない垂れ籠めて春の行方を知らぬ宮人の悲哀の裡には掬すべき宮人の誇張がある、故に私しの云ふ誇張は總ての物欲の世界から離れた、純白な本性の要求一切の萬難を排して孑然光明な世界に立つた佛の覺りの姿日蓮上人が幾多の過去を背景として旭の森に律然として立ち盡した不動の形其が如來使としての大の誇張ではなからうか、時間に徹し空間に超へた大なる融合であらねばならぬ、斯ふ思つて來た時に私は吾々と光明!!吾々と佛!!靈と肉!!物質と精神!!を想及せざるを得ない、吾々の佛身觀を佛は吾々の内に具すと見るか、佛は吾々の外に超越す

るものであると見るか、即ち、現實主義と理想主義の岐路を見出さずには居られぬ、私は二元論の立場か一元論の立場に徹底しなくちやならない一念三千の妙理と知つて居るし、三身論も若干の理解を持つて居る、當地是處即是道場の思想と考查して見た事もある、吾々は教導者である救世主である以上恁うしても現實より遠ざかる事が出来ない科學や哲學の示す所も一應は傾聴しなくてはならぬ、經驗や努力を尊重する現代は科學に教示された事も尠なくない、從來の宗教が往々にして未來或は理想主義に傾いたに反して科學は日常の生活の上に非常な權威ある證明を與へた事は又力ありと云はざるを得ない然し科學萬能主義に依つて稍々宗教に近接して來た或方面の識者は茲に宗教心の發端を開覺して居る唯物の世界から唯心の門に入らんとして居る、遠く自己から離れて漸く眞の自己なるものに還つて來ては居るが扱て其自己自身を怪しんで居る、現在自己の有する力に生氣を與へてくれる宗教其者を乏失して居る、斯ふし

た社會を教はんとするならば須く強い人格の光りを以て彼等に接せなければならぬ、自己自身に信仰の洗禮を實踐して其の浸しみの中から出た宗教家としての誇張を以つて凡てを指導すべきではなからうか、私は斯うした思想に悶へ苦策して止まない。

聖誕七百年にちなみて

津 田 春 曉

吾は身延に登りて祖山學院に入學し負笈する事日向淺く教義にうとし。されど此の短日月間に於て安心立命はいすれにあるかを自覺し得たり、そは即ち本化上行たる末法の大導師宗祖大聖人に信の一字を捧げ奉ると云ふ事なり。

そはそも何故自覺し得たるか、吾が病氣の悲しきが爲か非ず、祈願の爲か非ず、斯かる目前の小利には非ざるなり。宗祖大聖人の一生を推想し感激したるなり。殊に四ヶ度の大難伊東の流罪に溺

れ給はず龍之口に切られ給はず佐渡雪中の苦難にも亦飢へ給はざりし事は暫く措き、實に大聖人の御性格精神の偉大にして形容す可からざるに感ずるなり。偉大なる哉大聖人、劔の下も尚ほ寂光の都彼の伊豆の海の波間に漂ひ給ひ佐渡の國の雪中千鳥の聲に御夢を覺まさせ給ふ御身におはし乍らも「我此土安穩天人常充滿」「天長地久國土安穩」と祈らせ給ふを想ふ時誰か袂を絞らざる常に法華經の大義を唱へ滿天下の衆生を救はんとの大願を起し此の大願の前には「法華經の爲めに此の臭き頭を刎ねられんは砂に黄金を換へ糞に米を代ふるなり」と喝破し眼中權勢もなく威武もなき眞に高天淵地獨立獨歩の大豪傑が人情に厚く恩誼に深く其の情時としては禽獸の末に迄も及びし事は實に感涙に堪へざるなり吾が信の一字を自覺し得たるは此處にあり。此の信の一字を自覺し得實の信仰を捧げばいつしか安心立命の境に立入るを得るなり。

嗚呼太平洋上に洗はる、一島國に大聖人の御誕